

子どもの目の病気について

<弱視>

生後間もない赤ちゃんの視力は、ぼんやりと明かりがわかる程度で、視力としての数値は0.01程度とされています。

その後は、家族の顔を見つめたり遊んだりすることで、視力はだんだん発達していきます。

1年後には0.1前後に育ち、3歳頃までに急速に発達し、その後、ゆるやかに発達していき、4～5歳で1.0になり、8～10歳頃になると視力は完成し、大人と同様に見えるようになります。

乳幼児の視力の急速な発達段階に、何かの理由で網膜にはっきりと像が写らず刺激が加わらなかった場合、視力は育ちません。その後から、視力が育ち始めても、遅れを取り戻すことは出来ず、遅れた分は失われたまま追いつけません。その結果、弱視になってしまいます。

<斜視>

片方の目が内側に向いてしまう（内斜視）と外側に向いてしまう（外斜視）があり、上下方向の視線のズレが加わっていることもあり、ぼんやりとしていると現れ、しっかりと物を見ていると消失するケースもあります。

原因としては、両目の視線を合わせようとする脳の機能が悪い場合・眼球を動かす筋肉に異常がある場合、遠視の影響が強くなる場合（内斜視のみ）

次のような症状は、目が良く見えていないときや目の異常を表すサインですので気が付いた時には早めに眼科医受診をお勧めします。

<物の見方からわかるもの>

- 物を見る時、片方又は両方の目を細める、首を傾げる、顔を近づける。
- 片方の目を隠すと、途端に嫌がる。

<目の外観からわかるもの>

- 目が寄っている、別の方向にずれている。
- 目が振動している。
- 目の大きさが左右で異なる。
- 目の表面や中が濁っているように見える。
- まつげが眼の方に生えているために涙目になっている。
- 眼脂が多い、白目の充血、眼の痛み。

また最近では、テレビや携帯、パソコンやゲーム等で目に負担がかかりやすい環境となってきました。普段から、適度に目を休ませ、目の健康に十分な注意を払っていきましょう。

子どもの目の異常は、健診等で指摘されることが多いため、眼科受診を勧められたら、放置せずに受診することが大切です。